

源氏物語の「かの」攷

——源氏物語テキストの編集句——

はじめに

源氏物語テキストには、「かの」という語が繰り返して用いられている。その理由は何か。ここに源氏物語そのものの方法を明らかにする重要な視点のひとつがあるのではないか。

従来の草子地研究において、「かの」は「発語」として、ストーリー上の転換や場面の転換を示すとされてきた。だが、「かの」の用いられ方のすべてがそうであると言えるのであろうか。むしろ、直接的にストーリー上の展開にかかわらないところに用いられているとみえる「かの」にこそ、源氏物語テキスト編集の仕組みが認められはしないか。

源氏物語テキストは幾重にも重なった伝承の構成体であることを「かの」もまた示しているに違いない。ここにいう伝承とは、源氏

源氏物語の「かの」攷

広岡曜子

物語それ自体がとりこみ織りなしてきたところのそれを指すだけではない。源氏物語テキストが、それと並行するさまざまなテキストと共有して通時的共時的に見出される伝承断片を編集したものであることは言うまでもない。さらに、源氏物語テキストが、さまざまな視点からすでに論じられてきたように、「かくろへごと」と呼ばれる、光源氏にまつわる伝承を「物語り」という方法において編集したものであることをあらためて強調しておきたい。源氏物語テキストは、二重の意味において伝承断片が編集された構成体である。そのことと、源氏物語の内在的な鍵語である「かの」が密接にかかわっているのではないか。「かの」は伝承断片を織りなす編集句であって、単なる指示性の指摘をもってすませ得ないものがあるに違いない。そのような視座に基づいて、源氏物語の「かの」について考察する。

(一)

空蟬が伊予介とともに伊予へ下向するとき、それを知った光源氏は、空蟬に贈物をつかわせる。伊予介に空蟬とのが知られないように、ことさら空蟬へとは伝えずに、しかし格別な贈物を揃えるのである。

伊予の介、神無月の朔日ごろに、くだる。「女房の下らんにとて、たむけ、心殊にせさせ給ふ。又、うちくにも、わざとし給ひて、こまやかに、をかしきさまなる櫛・扇多くして、幣など、いと、わざとがましくて、かの小桂もつかはず。」(一・

174・夕顔卷)

櫛、扇、幣、小桂が光源氏から空蟬への贈物である。そのなかで、「小桂」だけが「かの小桂もつかはず」と表現される。それはなぜか。櫛、扇、幣と同じ、光源氏の目前に「小桂」もある。ところが、「小桂」については「かの小桂もつかはず」と表現されるのである。そこに、重要な問題がある。

指示語としての「かの」の性質については、阪倉篤義氏の見解がある。⁽²⁾ 氏の見解をまとめれば、次のようである。

「こ」系の指示語は「話し手自身を中心とする円周的に含められるもの」を表す。

「そ」系の指示語は「聞き手を中心とする円周的に含まれるもの」を表す。

「か」系、及び「あ」系の指示語は「話し手と聞き手とを同時に中心にするような、大きな円周の中に含まれたもの」を表す。

阪倉篤義氏の見解のなかでとりあげたいのは、「話し手が『あれ』と言えば、聞き手が、すぐに『ああ、あれか』と合点がいくようなものについてのみ」「か」系、及び「あ」系の指示語が用いられるとされる点である。

では、はじめにとり出した「かの小桂もつかはず」の「かの」の指示性とはどのようなものか。「かの小桂もつかはず」と表現されたとき、「かの」は、指示対象のイメージや象徴性を不確かな状態で想起させるのではないのである。「かの小桂もつかはず」と表現されたとき、それは話者と聴者に共有されていることである。光源氏と空蟬のことについて、それが話者と聴者ともに知り得ていることとして共有されているからこそ、「かの小桂もつかはず」と表現されるのである。「かの」に対して「その」は、話者が指示対象を知っているが、聴者は指示対象を知らないとき、あるいは話者が指示対象をよく知らないとき指示される。「この」は、目に見えぬものを指す場合もあるが、眼前のものに対する指示代名詞的性質がある。「この」は、話者だけがその指示対象を知っている

場合に指示されると言える。⁽⁴⁾ ここで「小桂」以外の櫛、扇、幣が「かの」と指示されないのは、それらが話者と聴者に共有されていることではないという理由に拠る。

指示語としての「かの」を源氏物語の読者の問題として論じたのは上野英二氏であった。氏は「かの」は「語手と読者に共有される事柄を指示する」と指摘されている。そのことは、重要である。しかし、その「語手と読者に共有される事柄」とは、氏の言われる「その人を象徴するような逸事」⁽⁵⁾を意味するの否かについては、考察を要するところである。「かの」の指示性を「かの」に続く語の象徴性の問題としてのみ捉えてはならない。

上野英二氏は、「かの」が、登場人物の誰によって、どのような心情でそこに用いられた語であるかは、みようとほされてはいない。それゆえに、「語手と読者に共有される事柄」とは、氏の指摘にそくして言えば客観的な意味での「事件」として存在するのであろう。氏は次のように「かの」の指示性について論じている。

「かの」の語は、読者に物語の既述の事柄に立ち戻って理解することを促すのである。(中略)「かの空蟬」というのは、従って、単なる人物の指示に止まらず、その人を象徴するような逸事までも読者に思い起こさせるはずである。ここに「空蟬」という語が、「あの空蟬事件の女」をその外延としていたこと

が了解されることとなる。⁽⁷⁾

「かの空蟬」と表現されたとき、「かの」の指示対象が直示的に聴者によってとらえられるのではない。「指示」は指差しという動作それ自体で完結しているのではなく、聴者の側での解釈的限定を俟ってはじめて成立する⁽⁸⁾のであり、「指示」が指示であるのは、話者自身にとってではなく、(中略)聴者との「共犯的」行為においてはじめて「指示」が存立する⁽⁹⁾のである。「あの空蟬事件の女」の「あの」とは、指示されるものの内容が既に話者と聴者ともに知られているという前提に立っている。そこに「この」「その」との差異がある。「かの空蟬」と表現されたとき、光源氏と空蟬のことは既に共有されていることとしてあり、「空蟬」なる語をあらたに指示することはないのである。

「かの小桂もつかはず」「かの空蟬」と表現されたとき、あたかも登場人物の間において指示されるとみえるが、じつはそれは話者と聴者に共有されることとして仕掛けられている。そのように仕掛けられたこととはどのようなものなのか。それを問わなければならぬ。

しかし、「かの小桂もつかはず」「かの空蟬」の「かの」という指示語だけで指示対象がとらえられるのではない。「△これ▽や△あれ▽は、指示の身振りを考慮に入れてさえ、ある△対象▽の境界画

定に十分でない¹⁰⁰のである。指示対象がとらえられるには、「ひとつの実詞¹⁰⁰」が必要である。「かの」に続く語や部分も、指示対象を對象としてとらえるために不可欠なはずである。

夕顔巻末においてストーリー上の連続性なしに「かの小桂もつかはず」と表現された。そのような「かの」が源氏物語そのものの方法にいかに関与しているかを次に明らかにしなければならぬ。

(11)

(11)で論じた話者と聴者の共有性の問題を、源氏物語それ自体の問題として考察する。

すなわち、客観的な「事件」として「かの」が指示するのではなく、光源氏の行為に話者と聴者が立ち合っているとみるならば、源氏物語における「かの」の性質をどのように考えることができるだろうか。

「かの小桂もつかはず」において「かの」と指示される前に、「小桂」(または「薄衣」)にまつわる光源氏の行為がある。その行為に相当する部分を、現行テキストにより順にあげてみる。

a. 火近うともしたり。「母屋の中柱にそばめる人や、わが心かくる」と、まづ目とよめ給へば、濃き綾の単襲なめり。何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに、小さき人の、ものげな

き姿そしたる。(一・111・空蟬卷)

b. かの、脱ぎすべしたる薄衣を取りて、出で給ひぬ。(一・117・空蟬卷)

c. ありつる小桂を、さすがに、御衣の下に引き入れて、大殿籠れり。(一・119・空蟬卷)

d. かの薄衣は、小桂の、いとつかしき人香にしめるを、身近くならして、見居給へり。(一・120・空蟬卷)

a~dのなかで重要なことは、aでは「かの」と指示されないのに対して、bでは「かの、脱ぎすべしたる薄衣を取りて、出で給ひぬ」と指示されることである。aは、光源氏が空蟬をかいま見るときのことである。空蟬の着物を見る光源氏の行為に話者と聴者が立ち合っているのであるが、「何にかあらむ上に着て」いる小桂らしき着物についてのことは、話者と聴者に共有されていることではない。これに対しbでは「かの、脱ぎすべしたる薄衣を取りて、出で給ひぬ」と「かの」によって指示される。それは、なぜか。「脱ぎすべしたる薄衣」のことは、話者と聴者に既に共有されている。aとbとの間に、薄衣を脱ぎ残して空蟬が光源氏から逃げ去ったことがあるからである。すなわち、『あさましく』おぼえて、ともかくも思ひわかれず、やをら起き出で、生絹なる単衣一つを着て、すべり出でにけり。(一・115・空蟬卷)ということである。「かの、脱ぎ

すべしたる薄衣」とは、空蟬と光源氏との間で、光源氏によって特定される「薄衣」であるとみえるが、じつは光源氏の行為に立ち合う話者と聴者に共有されていることにおいて特定される「薄衣」なのである。このことは、過去の「薄衣」を光源氏が思い出すという登場人物の心理的時間の問題ではない。cでは、「かの」と指示されない。「ありつる小桂」の「ありつる」は、むしろ登場人物の心理的時間に関与する性質を持っている。作中の存在を指示するのみで、「つる」に読者の関与する契機はない。dでは、「かの薄衣は、

小桂の、いとつかしき人香にしめるを」と指示される。a～cにおいての「小桂」「薄衣」についてのことをまとめているのである。「かの薄衣は、小桂の、いとつかしき人香にしめるを」とは、光源氏の心内であるとみえながら、その光源氏の心内に話者と聴者が立ち合い、話者と聴者の意識の深層にとらえられた「小桂」「薄衣」を指示している。光源氏の行為に立ち合う話者と聴者に共有されていることが「かの」と指示されるとき、共有されていることは、話者と聴者の意識の深層に喚起されることである。「いとつかしき人香にしめる」「薄衣」のことは、ここでも、光源氏の思い出なのではない。光源氏の思い出であるかにみえながら、話者と聴者の意識の深層に喚起される「かの薄衣」「かの小桂」についてのことなのである。「かの薄衣」「かの小桂」と表現されたら

き、空蟬が光源氏から薄衣を脱ぎ残して逃げ去ったことへの光源氏の思いがまつわっているかにみえる。しかし、じつは光源氏の思いに立ち合う話者と聴者の意識の深層が「かの薄衣」「かの小桂」にはまつわっているのである。「かの」は、空蟬や、さらには光源氏その人の心内のみに関与する問題ではないのである。

「かの薄衣」「かの小桂」について、薄衣や小桂は「かの」という語によって繰り返し指示されるのであるが、話者と聴者の意識の深層を繰り返し喚起する性質を「かの」はあわせ持っていると言えるのである。

たとえば、「かの」によってとらえられた「空蟬」や「帯木」にしていることが、繰り返し喚起されているのを認めることができる。「かの空蟬」の「空蟬」とは、いわゆる女君その人の実体をあらわすのではない。光源氏の心内にとらえられたことのように指示される「かの空蟬」についてのこととは何であるのか。

「かの空蟬」の場合、「空蟬」なる呼称を成り立たせるところの歌語が話者と聴者の共有性においてとらえられていると推測し得る。「空蟬」についてのことは、繰り返しあたかも光源氏の心内に喚起されることのようにみえる。しかし、源氏物語テキストそれ自体の問題として言うならば、「かの」によってテキストが、編集されているのではないか。女君その人の実体が指示され、その女君に関する

るイメージや象徴性が言語連想的にあらわされていくのではないのである。

このことを、源氏物語の夕顔巻を例として、光源氏の心内に立ち合いながらさらに考察してみる。

竹の中に、家鳩といふ鳥の、ふつゝかに鳴くを、きゝ給ひて、かの、ありし院に、この鳥の鳴きしを、「いと恐ろし」と思ひたりしさまの、面影に、らうたくおもほし出でらるれば(一・168・夕顔巻)

これは、夕顔死後、光源氏が二條院で夕顔とのことを想起する部分である。喚起される「かの、ありし院」のことは、光源氏の心内に立ち合う話者と聴者に共有されている。だが、「この鳥」のことは、共有されてはいない。「この鳥の鳴きしを、「いと恐ろし」と思ひたりしさまの」以下の部分は、共有されていることではないのである。「この鳥」のことは、ここでいまはじめて指示され、明らかにされることである。「この鳥」が光源氏にとってどんな意味を持つかは、いまから指示されることによってしか明らかにされ得ないのである。聴者は、既に共有されていることによって「この鳥」をとらえ解釈することができない。「この鳥」の指示対象は、「この鳥」に続く文脈内に求められるのである。「この」と「かの」の差異は、まず、そのような点に認めることができる。

この部分における「この」と「かの」の差異を、さらに明らかにしなければならぬ。「かの、ありし院」のことは、光源氏にとってという言い方でいえば、単に過去のことであるのではなく、光源氏から隔絶されてしまっていることである。「かの、ありし院」のことは、目前に触れようとしても触れられなくなってしまうことなのである。この世において、二度と再現されることのない「かの、ありし院」のことなのである。

それに対して、「この鳥」とは、いま光源氏が目前に見ているものとして指示されている。光源氏にとって、触れようとすれば触れることのできるものである。そこには、「かの、ありし院」へのかかわりにみられる隔絶感はない。「この鳥」とは、この世において、ものとして見ることのできる「鳥」であるからである。

夕顔巻の後の末摘花巻においても、夕顔とのかは「かの砧の音も、耳につきて聞きにくかりしきへ、恋しうおほし出でらるゝまゝに」(一・244・末摘花巻)「かの、物におそはれしをり、おほし出でられて」(一・256・末摘花巻)と、繰り返し喚起されるのである。その理由はどこにあるのか。この世において再現されることのない夕顔とのかは、末摘花との関係における光源氏の行動のひとつの基準、規範としてとらえられているのである。「かの」と指示されたとき、「かの」の指示対象は話者と共有され、即自化されている。

話者と指示対象は「この」「その」のように対立関係にはない。共有され、即自化されるところの指示対象は、「モノ」ではなく「コト」¹²と認められるのである。共有性においてとらえられる「コト」を基準、規範として、編集するところに源氏物語の方法をみてとることができよう。それは、他の女君との比較関係によって導き出される問題なのではない。この世ならざることとしての、隔絶された基準、規範としての「コト」である。「思へどもなほ飽かざりし夕顔の露」(一・235・末摘花巻)のことは、次に続く末摘花との関係を、それが光源氏にとってどのような意味を持つのか規定し続けていくのである。

「かの」と同じ「か」という語根を持つ語のひとつに「かしこ」がある。島崎健氏は、この世のみえるものに「かしこ」の指示対象を求められている。¹³氏の見解と、いま述べてきたことは、位相を異にすることとなる。。「かの」に続く「ありし院」とは、単に「場所」と言えるものではないのである。

「さて、いと美しかりつる児かな。何人ならん。かの人の御かはりに、明け暮れのなぐさめにも、見ばや」(一・187・若紫巻)

これは、若紫をかいま見た光源氏が、その後で若紫について想起する部分である。目前にみた若紫について「かの人の御かはり」と

指示されるのである。ここで、夕顔のように藤壺は死者ではない。しかし「かの人」と指示されたとき「かの人」は、光源氏にとって隔絶された存在である。目前に見ることのできる若紫は、隔絶された藤壺の存在を通してあるのである。「かの人の御かはり」とは、従来言われるところの、女君と女君との身代りの論理という意味としてはとらえられないのである。隔絶された藤壺との「コト」を規範として、増殖するテキストを「かの人の御かはり」に認めることができる。

(三)

『細流抄』において「かの」と「かの」に続く部分は、「草子地」と注釈されている。

彼の大武の北の方、のぼりて、おどろき思へるさま、侍従が、うれしき物の、今しばし、まち聞えざりける心浅さを、恥づかしう思へる程などを、いますこし、問はず語りもせまほしけれど、いと、頭いたく、うるさく、物憂ければなむ。今又も、ついであらむ折に、思ひ出でゝなん、聞ゆべきとぞ。(二・160・蓬生巻)

今すこしとはすかたりも 草子地也¹⁴
この部分の他にも、「かの、をかしかりつる火影ならば、いかが

はせむ』に、おぼしなるも、悪き御心浅さなめりかし。」(一・115・空蟬巻)について、「草子地也」「双也」「批判也」「草子の地」といった注釈を加えている注釈書がある。源氏物語の「かの」の性質は「草子地」とかかわるところがあるのではないか。

述べてきた「かの」についての問題を、さらに、源氏物語と読者の問題として考察したいのである。井爪康之氏は、『細流抄』において『弄花抄』や『一葉抄』が、作者の詞や草子の詞という語で注記してきた、物語作者があらわに介している地の文あるいは、作中世界についての注記や感想をのべている地の文に対して草子地という語を用いるように統一した¹⁶⁾と指摘されている。「草子地」が「作中世界についての注記や感想をのべている地の文」とする指摘は重要である。氏によれば、作中世界に対して、読者の立場から注記や感想をのべている「草子詞」とは、「作中世界の注」と、「作中世界の批評・感想」の働きをするという。

「かの」という語が「作中世界」と読者との間において働くといえよう。それはどのようなことか。『河海抄』が「かの」をどのように読んでいくかを手がかりとして、そのような「かの」の語の問題をあきらかにしたい。

『河海抄』は、次のように「かの」と指示される部分について注釈を加えているのである。

かのほゞきゝもいさなはれにけり

空蟬のことなり

はゞきゝの心もしらてとありしことなり いさなふはさそふ

心なり 引率¹⁷⁾

かのすき給にけむもやすからぬ思にむすほゝれてやなとをしはかるに

過去者也 柏木もえん煙のむすほゝれし事也¹⁸⁾

かのつくは山も

浮舟君の母の事也 常陸介が妻なれば当国の名所を云也¹⁹⁾

『河海抄』は、「かの」を、空蟬や柏木という固有名詞を直示的に指示する語として読んでいたのではない。「かの」の次に続く語や部分を、「かの」によって位置付けようとする読み方なのである。では、「かの」の指示対象とはなにか。「はゞきゝの心もしらてとありしこと」として、「かの」を解釈している。そのことが重要である。

『河海抄』以外の注釈書は、「かの」をどう読んでいたのであろうか。たとえば『湖月抄』は、「かのさしつどひたる」(一・143・夕顔巻)について「夕顔の心を源の思ひ給ふ也」と注記を加えている。この部分の「かの」が夕顔その人を指示するという注記のし方である。これは「かの」が光源氏の心内にかかわる語というところを

ある。また『一葉抄』では、「かの人の四十九日」(一・171・夕顔卷)について「十月四五日の程四十九日にあたるへし」と注記を加えている。この部分の「かの」が特定の時間を指示するという注記のし方である。「かの」は、時間的距離を指示するというとらえ方である。これらの注記のし方と『河海抄』の解釈とは、あきらかに差異があると認められる。『河海抄』は、「かの」の次にくる語及び次にくる部分を位置付け、保証するところの「コト」をそこにみようとしている。『湖月抄』『一葉抄』はそうではない。源氏物語の作中世界の特定の人物や時間に直示的に「かの」の指示対象を置き換えている。そのような互換性を持つものとして、「かの」に注記を加えているのである。これに対して『河海抄』の「——の事」という注記のし方は、単なる語の分析や主語が誰であるかの注記をしているのではないのである。

井爪康之氏はまた、「弄花抄と紹巴抄を総合すれば、『いはれを尺した』ことが源氏物語には所々あり、それらを全部指摘はしないが、注釈書によっては草子地と呼ぶこともあり得る」と言われる。²³

「いはれを尺したる」及び「訓釈するなり」と注釈書が説明するところの草子地は、「かの」の性質と関与するのではないか。

①の「かのはゞきゝもいさなはれにけり」についてみれば、『河海抄』は、「かの」に続く「はゞきゝもいさなはれにけり」の部分

について、それがどの巻に既述されているか、「はゞきゝ」とはどのような人物であるかといった注記を加えているのではない。「かのはゞきゝもいさなはれにけり」と表現されたとき、源氏物語と読者の共有性においてとらえられるところのことをみようとしている。源氏物語と読者の共有性においてとらえられるところのことをとり出してきて、源氏物語の「かの」の働きをみようとする方法がとられている。それは、単なる源氏物語の作中世界への注とは異なると考えられる。『湖月抄』『一葉抄』の「かの」についての注記のし方は、『河海抄』の解釈の方法に対して言えば、源氏物語の作中世界への注とみることができよう。

①についてみれば、「かのはゞきゝもいさなはれにけり」と表現されるとき、源氏物語と読者、すなわちここでは『河海抄』の注釈者との共有性においてとらえられるところのことは、「はゞきゝの心もしらてとありしこと」であるとみられる。

登場人物の誰かにとつての、という限定付けによっては説明のできない「かの」について、さらにみておきたい。

光隠れ給ひにしのち、かの御影に立ちつき給ふべき人、そのらの御末々にありがたかりけり。(四・349・匂宮卷)

光源氏が源氏物語から姿を消した後の、匂宮巻の「かの」であることの意味は重い。

注釈書は、この部分についてどのような注釈を加えているのか。

『湖月抄』は「かの」を「源氏ノ君」と注記する。『弄花抄』では「幻巻与此巻之間九年なるべし」と、幻巻と匂宮巻の時間的距離について注記している。『花鳥余情』でも、「光君嵯峨院に隠居し給ひて二三年後つゝに昇遐し給ひしことをいへり」と時間的距離について注記している。これに対して『河海抄』は、

ひかりかくれ給にしのみ

六條院崩給事也 深草の御門の御国忌に 文屋康秀

草深き霞の谷に影かくして日のおくれしけふにやはあらむ

と注釈を加えている。

「かの」と指示されなければ、「御影」が光源氏であることの根拠はない。「かの御影」と指示される時、「作中世界」と読者の共有性においてとらえられる「六條院崩給事」が、源氏物語それ自体の深層から喚起されてくるのではないか。「光」とは、この世には存在しないこの世ならざる価値である。この世ならざるかなたからこちらへ働きかけてくる「光」である。「光」とは、光源氏その人ではないのである。「かの御影に立ちつき給ふべき人」とは、この世ならざる価値としての「光」によって源氏物語に位置付けられているのである。

「コト」を規範として増殖するテキストを統括するところに、述べてきた「かの」の働きを認めることができる。源氏物語の編集の仕組みにとつて、「かの」は不可欠な語のひとつであるとみられるのである。

注

- (1) 『源氏物語』のテキスト引用は、すべて山岸徳平氏校注『源氏物語』（岩波書店）によっている。() 内の漢数字は巻数、アラビア数字は頁数、最後に巻名をあげる。
- (2) 阪倉篤義氏「改稿日本文法の話」(教育出版株式会社、一九七四年)。
- (3) 同書、一五四頁。
- (4) 「ヨ」「ソ」「ア」系の指示詞の諸問題については、田中望氏、正保勇氏『日本語の指示詞』(国立国語研究所、一九八一年)にまとめられている。
- (5) 上野英二氏「源氏物語における読者の問題」『国語国文』(一九八五年三月)二七頁。
- (6) 同右、二七頁。
- (7) 同右、二七頁。
- (8) 廣松渉氏『もの・こと・ことば』(勁草書房、一九七九年)一七六頁。
- (9) 同書、一七七頁。
- (10) O・デュクロ、T・トドロフ共著、滝田文彦氏他訳『言語理論小事典』(朝日出版社、一九七五年)三九六頁。
- (11) 同書、三九六頁。
- (12) 廣松渉氏、前掲書。
- (13) 島崎健氏「源氏物語五十四帖試論」『文学』(一九七六年、七月)。
- (14) 伊井春樹氏編『細流抄』、源氏物語古注集成? (桜楓社、一九八〇年)。

- (15) 榎本正純氏『源氏物語の草子地 諸注と研究』(笠間書院、一九八二年)。
- (16) 井爪康之氏「草子地の変遷——一葉抄から細流抄へ——」『中世文学』46(一九七〇年、三月)七〇頁。
- (17) 玉上琢彌氏編、山本利達氏・石田穰二氏校訂『河海抄』(角川書店、一九六八年)三四〇頁。
- (18) 同書、五三四頁。
- (19) 同書、五九〇頁。
- (20) 『源氏物語湖月抄』1、源氏物語古注釈大成第九卷(日本図書センター、一九七八年)一九三頁。
- (21) 井爪康之氏編『一葉抄』、源氏物語古注集成9(桜楓社、一九八四年)六五頁。
- (22) 井爪康之氏「古注における『草子地』概念の拡散現象——注釈者の態度及び注釈書形成の方法とのかゝわり」広島文芸女子大国文学会『文芸国文学』9号(一九八〇年、九月)一頁。
- (23) 井爪康之氏編『一葉抄』、源氏物語古注集成9(桜楓社、一九八四年)。
- (24) 伊井春樹氏編『細流抄』、源氏物語古注集成7(桜楓社、一九八〇年)。
- (25) (20)に同じ、二〇八頁。
- (26) 伊井春樹氏編『弄花抄』、源氏物語古注集成8(桜楓社、一九八三年)二三〇頁。
- (27) 伊井春樹氏編『花鳥余情』、源氏物語古注集成1(桜楓社、一九七八年)。
- (28) (17)に同じ、五三三頁。